



防衛研究所

The National Institute for Defense Studies

第一次世界大戦開戦 100 周年を迎えて——日本の関与を中心に  
戦史研究センター国際紛争史研究室長 石津 朋之

NIDS コメンタリー

第 38 号 2014 年 1 月 24 日

## はじめに

2014 年は第一次世界大戦開戦 100 周年に当たり、これを契機として既にヨーロッパ諸国を中心として歴史の見直し作業が活発に行われている。

他方、近年、海上自衛隊が日本から遠く離れたインド洋での給油活動やソマリア沖・アデン湾での海賊対処の活動を行ったこともあり、この戦争における日本海軍の地中海での護衛任務に対する関心が高まりつつある。もちろん、時代状況も期待された任務も全く異なる第一次世界大戦での海軍の活動と今日の海上自衛隊の活動を短絡的に結び付けることは厳に慎まなければならないが、同時に、こうした今日の時代の要請を一つの契機として、日本であまり話題に上がることがない第一次世界大戦の様相、とりわけこの戦争での日本の関与について知ること無駄ではない。

## 第一次世界大戦とその衝撃

1914 年夏に勃発した第一次世界大戦は「全ての戦争を終わらせるための戦争」と言われ、当初、この戦争は速やかに、遅くてもクリスマスまでには終結すると考えられたが、現実には 4 年以上もの長きにわたる「総力戦」となった。この戦争での犠牲者数は兵士・民間人を合わせて最低でも推定 2,000 万に上った。

この戦争についてウィンストン・チャーチルは後年、「第一次世界大戦以降、戦場から騎士道精神が失われ、戦場は単なる大量殺戮の場へと化した」と回顧している。また、歴史家ポール・ケネディは 20 世紀の終わりを迎えた 1999 年に、この戦争が 20 世紀をおおった影は、「以前にも増して長く、より暗く、より威圧的になっているように思われる」と指摘した。さらにケネディは、この戦争が近代において他のいずれの戦争よりも歴史の道筋を変え、この戦争の起源、過程、

そして結果は、20 世紀を理解するための鍵であるとさえ述べている。一方、歴史家ジョン・キーガンはこの戦争に対し、「その遂行方法は残酷、結果は破壊的で恐るべき戦争であった。ここに 20 世紀の病根の殆どが由来している」と厳しい評価を下している。

確かに、21 世紀を迎えた今日でも多くのヨーロッパの人々にとって「あの戦争」とは、第二次世界大戦ではなく第一次世界大戦を意味する。今日でも休戦が成立した 11 月 11 日は、ヨーロッパの人々にとっては特別な意味を持つ「時」である。筆者は、ほぼ毎年この時期にヨーロッパ各地を訪問しているが、とりわけ大陸諸国では今日でもこの日には、どんなに小さな町や村でも戦没者慰霊式典が行われている。

もちろん、第一次世界大戦の衝撃はヨーロッパだけに留まるものではなく、大きな戦いの場となった「アルゴンヌ」や「ベローウッド」という地名がアメリカ国民に、「ヴィミー」がカナダ国民に、さらには、「ガリポリ」という地名がオーストラリア及びニュージーランド国民に対して持つ意味を考えただけでも、その影響は極めて大きなものであったと言える。

また、ジャン・ルノワール監督——著名な印象派画家ピエール＝オーギュスト・ルノワールの次男で自身もこの戦争に参戦——による「大いなる幻影」という、第一次世界大戦当時のドイツの捕虜収容所を舞台とした 1937 年製作のフランス映画を憶えている方も多であろう。この中で、収容所長のドイツ軍将校と捕虜のフランス軍将校は共にヨーロッパ貴族階級に属しており、敵・味方とは言えど互に通じ合うものがある。なぜなら、彼らはこの戦争で「貴族の時代は終わった」との認識を共有するようになったからである。この映画に見事に象徴されているように、第一次世界大戦は一つの時代の終わりを告げる戦争であ

り、一つの時代の幕開けを告げる戦争であった。

実際、この戦争での犠牲者が比較的少ないとされるイギリスですら、多くの将校を輩出したエリート階級の子弟を教育するパブリック・スクール（私立高校）、例えば、イートン校ではこの戦争に従軍した 5,588 名の卒業生のうち、1,159 名が戦死し、1,469 名が負傷したとの記録がある。イギリス国民はこの世代を今日でも、哀惜の意味を込めて「1914 年の世代」あるいは「失われた世代」と呼んでいる。

前線の兵士だけではなく、銃後の全ての国民の参加を不可欠とした第一次世界大戦——しばしば総力戦と呼ばれる——においては、どうしても国民が納得できる戦争目的が必要とされ、それが第二次世界大戦での無条件降伏政策へと発展する。また、科学・技術、大量生産、そして中央集権化された政府といった言葉に代表されるこの時代の社会的な要因が、この戦争の様相、とりわけその破壊の規模の大きさを規定したことは言うまでもない。その結果、「国民総武装」といったナポレオン戦争時代の概念は、「国民総戦時」というさらに大きな戦争の概念に取って代わられた。これは、第一次世界大戦においては国家が兵器や食糧を生産してその兵士に供給することが、兵士そのものの質よりも遥かに重要になってきたことを意味した。

また、総力戦としての第一次世界大戦は戦後のヨーロッパ社会、さらには国際社会全体にも大きな衝撃を与えた。この戦争の経験がもたらした社会の変革への強い志向は、新たな運動及び体制であるファシズムにも強い影響を及ぼした。兵士や物資などの効率的な総動員体制をいかに構築すべきかとの問いは、あらゆる国家が直面した共通の課題となった。そして、こうした課題に応えるべく多様な政治的実験が試みられ、その代表がファシズムであったが、改革への志向はリベラル民主主義が定着しているとされるイギリスですら例外ではなかった。そして、こうした運動や体制の中から多数の革新的なヴィジョンを抱く人物が登場したが、これは明らかに、総力戦としての第一次世界大戦に対する彼らの鋭利な認識と関係している。

## 日本の関与

このように国内及び国際社会に大きな変革をもたらすことになる第一次世界大戦に、日本は1914年8月23日、日英同盟の情誼により対独宣戦布告することで参戦した。

確かに、この戦争での日本の関与はヨーロッパ主要諸国やアメリカなどと比べて決して大きなものとは言えない。だが、それでも日本は、今日の我々の想像以上にグローバルな地域で関与していたのである。この戦争での日本の関与は、便宜上、以下の4つに区分することができる。

第一は、アジア太平洋地域、さらにはインド洋での関与であり、青島上陸作戦などを例外とすれば、これらは主として海軍によるものであった。この中には、西太平洋のドイツ領南洋群島（マーシャル諸島、カロリン諸島など）の占領、シュペー提督指揮下のドイツ東洋艦隊の追跡（インド洋でのドイツ軽巡洋艦「エムデン」の追尾を含む。また、東洋艦隊の追跡は、その後の「コロネル沖海戦」や「フォークランド沖海戦」につながる）、オーストラリア及びニュージーランド軍の護送、太平洋のほぼ全域にわたる哨戒、さらには、1915年2月にシンガポールで起きたインド人兵士による反乱の鎮圧などが含まれる。

第二は、連合国側への武器と弾薬の輸出である。この事実は今日、ヨーロッパの歴史家にもあまり認知されていないが、1916年のロシア軍による「ブルシロフ攻勢」が日本の武器弾薬なしで実施し得えなかったであろうとの評価が存在するように、日本の対口武器輸出は相当な量に上った。また、日本はフランスに対しても武器を輸出し、同国のために12隻の駆逐艦を建造している。もちろん日本は、同盟国であるイギリスに対しても、海軍を中心として積極的に武器輸出を行った。連合国側へのこうした武器や弾薬の輸出はほぼ全てが有償であり、結果的に日本はかなりの額の外貨を獲得した。今日、東京の国立西洋美術館に展示されている絵画類の基となった「松方コレクション」は、その多くは船舶不足に悩むイギリスに対する輸出で得た利益を元手に収集したものである。

第三は、1918年から開始されたいわゆる「シベリア出兵」である。この出兵はその後、1922年（北樺太の保障占領を含めれば1925年）まで継続されることになるが、日本は7万以上もの兵士を派遣した。出兵のそもその目的は、第一次世界大戦中に新たに誕生したポリシェヴィキ政権が停戦した結果、領内に残り残されたチェコ兵（当時はオーストリア＝ハンガリー帝国軍の一員としてやむを得ず参戦していたが、民族の独立を求めてその多くが戦線を離脱していた）をヨーロッパ戦線に戻すため、また、それまでロシア領内に保

管されていた大量の軍事物資がドイツ側にわたることを阻止するためであったが、当然ながら、状況の推移と共に日本側の出兵目的も拡大することになった。

第四が、この小論の主題となる地中海での護衛任務である。1916年12月に日本はイギリスから地中海への艦隊派遣要請を受けることになるが、もちろん日本としても、この護衛任務と引き替えに西太平洋でのドイツ領南洋群島の割譲など、戦後の講和会議を見据えた上でこの要請を受諾した。実際、日本は第一次世界大戦後のヴェルサイユ講和条約で新たに創設された国際連盟により、この南洋群島の赤道以北を委任統治領として事実上占有することが認められた。

### 地中海での護衛任務

第一次世界大戦に参戦した日本は、ドイツ東洋艦隊の基地であった山東半島の青島<sup>チンタオ</sup>攻略、西太平洋のドイツ領南洋群島の占領など積極的に関与を続けたものの、1917年までは、基本的にアジア太平洋地域に限定されていた。そうした状況の下、ヨーロッパでの要員及び物資不足、さらにはドイツ潜水艦による連合側船舶への攻撃の脅威が高まる中、日本はイギリスからの要請に応じる形で1917年4月から第二特務艦隊を地中海に派遣し、ドイツ潜水艦に対して連合側船舶を護送する任務に就いた。

第二特務艦隊は佐藤皐蔵少将を司令官とし、当初は巡洋艦「明石」と駆逐艦8隻が派遣されたが、その後、「明石」の代艦として装甲巡洋艦「出雲」が、そして、1917年2月に開始されたドイツの無差別潜水艦作戦に対応するために駆逐艦4隻が増派された（実際にはスループ艦2隻やイギリス海軍から貸与された駆逐艦2隻などの運用でその規模はさらに大きくなる）。この特務艦隊は、当時はイギリス領であった地中海のマルタを基地として、主にマルタ＝マルセイユ（フランス）、マルタ＝タラント（イタリア）、そして、マルタ＝アレキサンドリア（エジプト）を結ぶ海上交通路での護衛任務を中心に活動することになる。

形式上、第二特務艦隊は独立して任務を遂行することになっていたが、実際はマルタのイギリス地中海艦隊司令官の「命令」を受けて活動した。史料によって少し数字は異なるが、特務艦隊は348回にわたって護衛任務を実施し、連合国艦艇及び輸送船788隻を護送、約75万の要員を護送すると共に34回の戦闘を行った。

ドイツ潜水艦に対する戦果は大きいと報告されていたが、戦後の調査によれば、撃沈した潜水艦は1隻もなかった。こうした護衛任務の実態については、『日本海軍地中海遠征記——若き海軍主計中尉の見た第一次世界大戦』（片岡覚太郎著、C. W. ニコル編集、河出書房新社、2001年）などによってその一端をうかがい知ることができるが、この小論では以下の3つのエピソードを紹介しておこう。

第一は、1917年5月、第二特務艦隊がドイツ潜水艦による魚雷攻撃を受けて沈没したイギリスの客船「トランシルヴァニア」（要員及び軍事物資を輸送）の救助活動を2隻の駆逐艦で行い、その乗員約3,300のうち3,000名を救助したことである。ドイツ潜水艦がまだ近海に潜んでいることを承知の上で実施されたこの救助活動に対しては、イギリス国王より27名の日本海軍将校及び水兵に勲章が授与された。

第二のエピソードは悲劇的なものであった。駆逐艦「榊」が1917年6月、クレタ沖の東地中海でオーストリア潜水艦から魚雷攻撃を受けて大破、艦長以下59名の死者を出す惨事となった。

第三は、1918年春の西部戦線におけるドイツ軍の大攻勢「カイザーシュラハト」を受けて、連合側が要員や物資を大量にヨーロッパに送り込むことが喫緊の課題となったことに関係する。周知のように、この攻勢はドイツ軍が通常の歩兵部隊よりも先に、自動小銃、機関銃、そして歩兵砲などを装備した「浸透部隊（突撃部隊）」を緩やかな鎖状にして展開させたことに大きな特徴があり、第二次世界大戦における「電撃戦」の一つの源となったものである。その結果、この大攻勢でのドイツ軍最前線はフランスの首都パリから約100キロの地点にまで進攻できたのであるが、このような状況の下、西部戦線を崩壊させないために連合側は、地中海でアレキサンドリアとマルセイユ間を「ビッグ・コンボイ」と呼ばれる護送船団方式を用いて、ドイツ潜水艦の脅威に対抗しながら要員や物資を輸送することを決定した。そして、ここでも活躍したのが第二特務艦隊であり、往復5回にわたるこの任務で日本は中核的な役割を果たすと共に、最小限の被害で船団の護送に成功した。

### 日本の関与に対する評価

決して派手とは言えないものの極めて重要なこ

した日本海軍の護衛任務は、イギリス海軍軍人を中心にその実態を知る人々から高い評価を受けることになる。ある歴史家の言葉を借りれば、「こうした日本の貢献、とりわけドイツ潜水艦との戦いをめぐる決定的に重要な時期における貢献は、殆ど忘れ去られているものの、決して小さなものではない」。

この護衛任務に限らず、いつの時代においても兵站（あるいは補給）の重要性は絶対に忘れてはならず、その意味においても、西部戦線を文字通り「下から支えた」第一次世界大戦での日本海軍の活躍は、正當に評価されてしかるべきである。

地中海での護衛任務を考えるに当たって惜しむらくは、ここで得られた様々な貴重な「教訓」、例えば通商破壊戦の重要性、海上封鎖と潜水艦戦・対潜水艦戦の重要性、機雷や魚雷の有用性、武装商船（マーチャント・ネイビー）や護送船団方式の有用性が、太平洋戦争での海上での戦いにあまり反映されなかった事実である。

#### おわりに

確かに、第一次世界大戦全体を俯瞰すれば、例えばヨーロッパ西部戦線での「ヴェルダンの戦い」や「ソンムの戦い」での惨劇とその膨大な犠牲者数——レマルクの小説及び映画『西部戦線異状なし』などで示されたこの戦争の「記憶」——と比べれば、日本の地中海での護衛任務など小さなエピソードに過ぎない。

モードリス・エクスタインズの著『春の祭典——第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』（金利光訳、みすず書房、2009年）のタイトルに示唆されているように、第一次世界大戦、とりわけ西部戦線での戦いは、まさに1913年にパリで初演されたストラヴィンスキー作曲のバレエ音楽「春の祭典」が、ニジンスキーの

振付と共にヨーロッパの人々を驚愕させたのと同様、人々の「世界観」を一変させる出来事であった。

また、この戦争の海上での戦いに限っても、「ユトランド沖海戦」などが第一次世界大戦全体の帰趨に及ぼした影響と比較すれば、地中海での護衛任務の重要性は決して高いものとは言えない。さらには、同じ地中海での護衛任務を考えても、1917年4月に遅れてこの戦争に参戦したアメリカが大規模な海軍を地中海や大西洋に投入して活動した事実と比べても、この護衛任務があまり人々の記憶に残るものではないことは事実である。その意味において、この戦争全体での日本の関与については過大に評価されてはならない。

しかしながら、1917～18年の期間、特務艦隊が日本から遠く離れた地中海で黙々とその任務を遂行して一定の評価を得た事実は、同じ日本人として記憶に留めておく必要がある。実際、武器や弾薬の輸出といった間接的な支援とは異なり、地中海での直接的な護衛任務は、日本が連合国の一員として第一次世界大戦を共に戦っているという事実をヨーロッパの人々に明確に示し得た数少ない機会であった。そして戦後、この艦隊がイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国を訪問したことで、この戦争の勝利に対する日本の貢献についてヨーロッパの人々は認識を新たにした。

この小論を終えるに当たり、第一次世界大戦後の国際秩序すなわち平和について考えてみれば、戦勝国の一員である日本は、戦後の国際秩序であるヴェルサイユ体制やワシントン体制を維持することに利益があったはずであり、実際、維持すべきであった。だが、日本が逆にこうした体制を積極的に打破する政策を打ち出した事実は、その後の日本の悲劇を予感させるものであった。

(2014年1月20日脱稿)

#### プロフィール

profile

戦史研究センター  
国際紛争史研究室長  
石津 朋之

専門分野：戦争学、戦争哲学、第一次世界大戦

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。  
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。  
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3713-5912

代 表：03-5721-7005（内線 6584, 6522）

FAX：03-3713-6149

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.go.jp>